
私篇 『続・のだめ』 初共演 Ⅱ

瓢六玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私篇 『続・のだめ』 初共演 I I

【Nコード】

N 1 1 2 3 L

【作者名】

瓢六玉

【あらすじ】

のだめ&mp;千秋の最終公演は、のだめの故郷・大川で行われた。

母校のコンサートを皮切りに、サントリーホール、シンフォニーホールといずれも大成功裏に終え、のだめ&千秋はセンセーショナルな日本デビューを果たした。

ライジングスター・オケも結成来、最高のパフォーマンスで盛り上げ、どの演奏をとっても最高のライブ盤が出来そうな出来映えであった。

移動とり八の間は、桃大同窓会のような和気あいあいとした雰囲気、それはまるで小澤征爾とサイトウ・キネンのようなアットホームなものだった。

日本最後の公演は、のだめの故郷、大川市民会館でのコンサートであった。

地方公演でキャパの小さな多目的ホールにもかかわらず、東京・大阪公演の大成功がネットで評判になり、日本国中のクラシック・ファンや、にわか「のだめファン（おっかけ）」が前日からかけつけ、さながら大川の町は音楽祭のような熱気にあふれていた。チケットも一部プラチナ化し、ダフ屋のものやネット・オークションでは5倍もの値をつけた。

のだめ家族はそんなこともつゆ知らず、家族枠でしっかり5枚送られてきた。

のだめは大川の生んだ大作曲家・古賀政夫先生以来の著名な音楽家となった。

コンサートは日曜日の午後二時に開演だった。

この日も、のだめは母洋子の手づくりドレスを纏った。

それは、まるでのだめが子どもの頃、はじめての発表会に着

たようなフリルつきの華やかなものだった。

「のため、ちつとガキツぽくねーか」

と脇から龍太郎が口をはさんだ。

「そーよ。あんた、まるで七五三みたいよ」

と真澄ちゃんがからかった。

「言えてるな」

と千秋も否定しなかった。

「ムキーツ！ なんなんですか、みんなしてー」

とのためは頭を掻きむしって髪をバサバサにした。

「のためちゃん。素敵よ、そのドレス・・・」

黒衣の清良が、ソリストののために羨ましそうに言った。

「そつよ。のためちゃん。とつても可愛いわ」

マキちゃんも素直に感心してくれて、ようやく、のためも気が収まった。

本ベルが鳴った。

客席の期待による熱気が舞台の袖から恐いくらいにムンムンと伝わってきた。

千秋がみんなの前で一喝した。

「さあ。楽しい音楽の時間だ！」

「ひゃいッ！」

と一同、胸を反らしてピンとあらたまった。

のためひとりが、半白目になって千秋に敬礼をしていた。

指揮者とソリストがもったいぶって後から出てくるのではなく、オケの仲間たちとそろそろ一緒に舞台にでてきた。

コンマスの清良のチューニング・サインで軽い騒音が舞台に響いた。

その間、のだめは浅く椅子に腰掛けて、軽く指先をこすりあわせていた。

そして、合間に千秋とアイコンタクトして微笑みあった。

すると、会場から

「お姉ちゃん！　がんばりやー！」

という弟の張りのある声が場内に響いた。

会場はドツと沸き上がり、のだめもその方向に笑顔で手を振った。

見ると、家族五人プラス町内の顔見知りとで

「めぐみ。気張りんしゃい！」

という横断幕を拡げていた。

(ひえー・・・)

と千秋は赤面したが、いかにものだめの凱旋コンサートらしくもあり苦笑した。

プログラムの順序は大阪公演からラフマニノフを初めにやることに変えていた。

チューニング音もやみ、指揮者もオケも、のだめのソロの開始を待つばかりになった。

そのむかし、千秋が大学祭でシュトレーゼマンと共演した曲である。

そして、その演奏にすっかり魅了され、千秋とピアノ・デュオで合わせた思い出の曲である。

ピアノ・シモの主音がコーンと鳴らされた。

瞑想的に進行したところにオケのぶ厚い弦の音が絡んできた。そしてピアノは息詰まるようなアルペジオのパッセージへと

・・・

曲が深まるにつれ、ロシアの大地が目に見えかぶようなメロデ

イーと肉厚のハーモニーが悠然と流れ、聴衆のたましいを揺さぶった。

三楽章のフィナーレからエンディングに向かうと、ソリスト、コンダクター、オケのパッションも最高潮に達し、華やかな幕切れで観客は忘我の興奮に見舞われた。

一曲目からブラボーコールと総立ちのスタンディング・オベーションとなった。

けっして広くない音楽専用ホールでもない会場がワンワンと熱気で唸っていた。

楽屋に引つ込むと、千秋はのための指がいつにもまして回りにまわっていて余裕すらあったのに、あらためて驚愕していた。

そして、すくなくとも大学祭の自分のソロをはるかに超越していると確信した。

また、自らの指揮が、はたしてシュトレゼマンの演奏に匹敵しうるものだったか、という疑念がふと湧いた。

日々進化するののための恐るべきスーパー・パフォーマンスに応えるには、そうとうのエネルギーと集中とバトン・テクニクが必要であることを、千秋はこのツアーで思い知らされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1123/>

私篇 『続・のだめ』 初共演 II

2010年10月15日21時48分発行